

ふたつの〈アフリカ大陸に行く〉
NHK海外初取材番組にみるアフリカの表象

内海 博文 櫛引 祐希子

Two “Afurika Tairiku wo Iku” : Representations of Africa
seen in NHK’s first overseas reporting program

Hirofumi UTSUMI Yukiko KUSHIBIKI

ふたつの〈アフリカ大陸に行く〉 NHK海外初取材番組にみるアフリカの表象

内海 博文 櫛引 祐希子

Two “Afurika Tairiku wo Iku” : Representations of Africa
seen in NHK’s first overseas reporting program

Hirofumi UTSUMI Yukiko KUSHIBIKI

要 約

本稿の目的は、NHK初の海外取材TV番組「アフリカ大陸に行く」(1959~1960)、および、同番組の特別報道班が出版した著書『アフリカ大陸に行く』(1960)にみられる、アフリカの表象のあり方を分析することである。まず筆者らは、2016年度第2回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルを通じて、「アフリカ大陸に行く」(1959年から1960年放送)を視聴した。そのうえで、現存する「アフリカ大陸に行く」の台本(第1、2、3、5、6集)と『アフリカ大陸に行く』にみられる言語表現上の違いを整理した。続いて、戦後の小学校や中学校での歴史や地理の教科書をはじめとするアフリカに関する文献を手がかりにして、当時のアフリカについての知識や理解を整理した。このアフリカに対する基本的な認識のフレームを手がかりに、「アフリカ大陸に行く」と『アフリカ大陸に行く』が生み出された基本的なプロセスを再構成し、それによって両者の内容上の相違を詳細に検討した。本稿から得られる示唆は以下の通りである。アフリカを分析するための理論的な枠組は、私たちの日々の経験を組織化しているフレームとつながっている。であるからこそ、アフリカの表象は変わりにくく、またアフリカの表象だけを独立して変更することはできない。だが、それでもフレームの更新は可能である。新しいフレームは、手持ちのフレームの作り替えによって可能になる。そしてその手がかりは、手持ちのフレームから見えるアフリカの表象のなかにすでに与えられているのである。

キーワード：アフリカ、表象、フレーム、メディア

1. はじめに

日本におけるアフリカの認識について、川端（2009：231）は「貧困、紛争、独裁政権、感染症の蔓延など暗いイメージと豊富な文化、ライオンやフラミンゴなどのサファリ、マサイ族などの民族衣装、楽弓などの民族音楽楽器などに代表される明るいイメージというなかば二律背反したイメージ」があると指摘する。そして、こうしたイメージが形成された理由は、日本人がアフリカを「遠い」存在として捉えているからだという。

「遠い」存在であるアフリカを日本は近代化の手本とした西洋列強の文脈のなかで理解しようとした。その結果、「ヨーロッパを進歩と文明の光の世界とし、アフリカを停滞と野蛮の闇の世界とする一対の世界認識が、数百年の年月をかけてつくりあげられていった」（松田 1997：553-554）。藤田（2005）は、安土桃山時代から昭和期までの日本におけるアフリカのイメージはヨーロッパを主軸にした世界観に多かれ少なかれ影響を受けているとする。そしてアフリカを人種的な階層の底辺に位置づけた『世界国尽』の巻六「地理学の総論」が1873（明治6）年に小学校の教科書に選定されたことで、「日本人の一般的なアフリカ観は、『世界国尽』のイメージ通りに定着したといっても過言ではないだろう」（藤田 2005：117-118）と論じる。アフリカを近代化の後進の地域とするこうした認識は、現在においても社会に浸透している。これは実に驚くべきことである。その理由は、ふたつある。

まず、事実としてアフリカは決して近代化が遅れている地域ではない。近代化をヨーロッパ的な社会制度や技術の移植と捉えなおせば、ヨーロッパ各国の植民地であったアフリカには、地域差はあるにせよ、実は日本よりも近代化が進んでいた所もあった。それにもかかわらず、未だにアフリカを後進の象徴的な地域として捉える認識は根強い。もうひとつの理由は、ある国や地域を先進か後進かに位置づける分類自体が、ポストモダニズムと呼ばれた20世紀後半以降成立しなくなったということである。それにもかかわらず、近代化の進捗を国の発展段階として捉える見方は未だに我々の思考を支配している。

アフリカを後進の地域とする認識の浸透に一役買っているのが、メディアによる表象である。中立的な立場から事実の報道に徹するはずのメディアが、取材対象に対する視点や述べ方によって対象の表象を生産する役割を果たしていることは、既に多くの表象研究で指摘されている。アフリカに関する表象も例外ではない。特にアフリカの場合、先に引用した川端が言うように日本から地理的にも心理的にも遠い存在であるために、メディアが描くアフリカの表象が日本におけるアフリカのイメージの形成に及ぼした影響は計り知れない。

だが、メディアが大衆に向けた情報媒体であり、発信する情報を読み解くためのコードを大衆の側に合わせる傾向があることを踏まえると、メディアが発信するアフリカ関連の情報は新奇なものではなく既に大衆の側にあった情報を強化しているだけということもありうる。つまり、メディアが描くアフリカの表象は、日本社会におけるアフリカのイメージを新しく形成するのでは

なく、再生産しているに過ぎないかもしれないということである。とすれば、メディアにおけるアフリカの表象を分析することは、日本におけるアフリカのイメージの形成およびその基盤となった認識のありようを明らかにすることにつながると考えられる。

本稿に登場するふたつの〈アフリカ大陸に行く〉のうちのひとつは、1959年12月10日から1960年3月4日まで10回にわたりNHKで放送されたTV番組の「アフリカ大陸に行く」である。豊原謙一記者、山下昭夫記者、佐野勇カメラマンの3名がNHK特別報道班としてアフリカ大陸の22カ国をまわった「アフリカ大陸に行く」は、日本の放送史において初めての海外取材番組であるという点で記念碑的な存在である¹。

当番組は反響を呼び、TVだけでなくラジオでも放送された。しかし、その反響の大きさは放送直後の1960年4月に二見書房から特別報道班の著書として『アフリカ大陸に行く』が刊行され、1962年までに11版が重ねられたという事実こそ端的に表れていると言えるかもしれない。本研究で扱うふたつの〈アフリカ大陸に行く〉のうちのもうひとつが、この書籍である。

本稿は、筆者らが2016年度第2回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルで視聴したTV番組の「アフリカ大陸に行く」と書籍の『アフリカ大陸に行く』の比較を通して、異なるメディアにおけるアフリカの表象の描かれ方と、そうした表象が生み出された背景について論じるものである。

2. NHK海外初取材番組「アフリカ大陸に行く」について

NHK特別報道取材班（豊原兼一、佐野勇、山下昭夫）は、1959年11月13日に日本を發った。この日は13日の金曜日であり、かつ三隣亡であり、仏滅でもあったため、当初は変更も検討されたそうだが、豊原記者が『放送文化』24巻10号で「これは偶然の一致だから、かえっていいことがあるだろうということで、11月13日出発を執行したわけです」（1969：53）と語るように、アフリカでの報道班の取材は多少の変更を余儀なくされながらも無事に終了した。

『放送文化』21巻12号で江上（1966：4）が「アフリカ大陸に行く」を海外取材のシリーズ番組のはしりとして紹介しているように、この番組の成功を物語るのは、その後もNHKが海外取材番組をシリーズで制作したという事実である。「東南アジアに行く」（1960年3月～5月）、「中南米に行く」（1960年7月～9月）、「中近東に行く」（1960年10月～12月）、「北米大陸に行く」

1 1958年に西日本新聞社が製作した教育映画「新しいアフリカ」が、最近、東京都国分寺市の都立多摩図書館で発見された。本稿でも登場するエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝が1956年に来日した際、3人の日本人女性を新しい宮廷生活の指導のためにエチオピアに招いた。それにあわせて西日本新聞社の記者であった先川祐次さんが特派員として派遣された。先川さんは、16ミリの映画用カメラを持って約半年間、エチオピアをはじめとするアフリカ各地を撮影した（<https://www.nishinippon.co.jp/nnp/culture/article/439330/>、閲覧日：2018年11月3日）。

(1961年4月～7月)、「ソビエトに行く」(1961年8月～10月)、「東欧に行く」(1962年4月～6月)など「〇〇に行く」というタイトルを受け継ぐかたちで海外取材番組が制作されたということに、「アフリカ大陸に行く」という番組が後続に与えた影響の大きさがうかがえる。不吉な日程で始まった報道班のアフリカへの旅は、日本の放送史にその名を刻むような成果を残したのである。

とはいえ、「アフリカ大陸に行く」は、現在のシリーズものとは幾つかの点で異なる。下の表は、当時の放送日時をまとめたものである。

放送日時	副題
1959/12/10 21:30-22:00	第1集 エジプト
1959/12/24 21:30-22:00	第2集 エチオピア
1960/1/2 21:30-22:00	第3集 ケニア, ウガンダ
1960/1/14 21:30-22:00	第4集 南アフリカ, ロードシア
1960/1/21 21:30-22:00	第5集 ポルトガル領モザンビーク, ベルギー領コンゴ, コンゴ共和国
1960/2/4 21:30-22:00	第6集 カメルーン共和国, チャド共和国, 中央アフリカ共和国
1960/2/7 21:25-21:50	第7集 シュバイツァー博士を訪ねて
1960/2/18 21:30-22:00	第8集 ナイジェリア, ガーナ, 象牙海岸共和国
1960/3/3 21:30-22:00	第9集 リベリア, ギニア, セネガル, モロッコ
1960/3/4 21:30-21:45	第10集 動乱後のアルジェ

【表】「アフリカ大陸に行く」の初回から最終回までの放送日時と副題

10回にわたり放送された「アフリカ大陸に行く」は、たいてい9時半からはじまるが、第7集のみ5分早く放送されている。また、最終回の第10集のみ番組は15分で終了している。しかし何よりも目を引くのは、各回の副題である。第7集のみ国名ではなくシュバイツァーの特集となっている。

放送日がランダムであるのはシリーズものとして一貫性を欠くように思えるが、当時のTV番組欄を見ると番組の編成そのものがランダムに組まれていることから、当時は放送日より放送時間を揃えることの方を重視していたと考えるべきかもしれない。

第7集のみ放送開始時間が異なるのは、この回が他の放送回のように国にスポットを当てたものではなく、シュバイツァーという個人を取り上げた番組になっていることが関係していると考えられる。他の番組内容と一線を画す第7集について、豊原記者は『放送文化』24巻10号で「あの番組が非常に成功したのも「シュバイツァー病院を訪ねて」という一本を織り込めたからで、非常に反響を呼んだようですね。」(1969:53)と述べている。帰国後、豊原記者は『国際文化』77号(1960:5-7)に、そして山下記者は『The Youth's companion』15巻4号(1960:4-7)にシュバイツァーの病院を訪問した4泊5日の体験を掲載していることから、「アフリカ

大陸に行く」においてシュバイツァーへの取材が大きな意味を持っていたことは確かである。

また、このことは「アフリカ大陸に行く」の映像と音声の現存状況からもうかがえる。映像と音声が残っているのは第7集のみであり、他の回は映像のみしか残っておらず、第4集は映像と音声のどちらも残っていない。当時の放送事情を踏まえれば、映像と音声の両方を残せないのは致し方ないことであったにせよ、第7集のみ映像と音声が残存しているというのは、NHKが「アフリカ大陸に行く」の第7集をとりわけ重視していたからにはほかならない。

第7集の特別感は、番組の構成にも表れている。番組の冒頭は、他の放送回では【図1】のように世界地図をバックに「アフリカ大陸に行く」のタイトルが映し出され、次に佐野カメラマンのシルエットと名前が表示される場面へと続くが、第7集はシュバイツァーの診療所の鐘がアップで映し出され鳴り響く場面から始まり、シリーズものというより全く別の番組の構成になっている。



【図1】「アフリカ大陸に行く」冒頭

シュバイツァーへの評価が当時と現代で異なることを鑑みれば、こうしたシュバイツァーを中心に据えた番組の制作と構成には隔世の感が否めない。しかし、現代を生きる私たちにとって、それ以上に不可解に思えるのは、シュバイツァーが活動拠点にしていたガボン共和国の様子が、TV番組では一切報じられなかった点である。帰国後に刊行された『アフリカ大陸に行く』では、「めぐまれた黒人の国」という章でガボンの首都リーブルビルについて次のような記述がある²。「リーブルビルの街を歩くと、美しい近代的な学校や、目下建設中の病院などが、よく目についたし、黒人の子どもたちが身ざれいな服装で通学している風景や、子どもを抱いて診療所に育児の相談にきている若い母親たちの姿も見られた。(略)。そして海浜には、黒人の若い女と白人の女とが、まっかなビキニ・スタイルの水着をつけて、いっしょに泳いでいる風景が、わたくしたちの目をたのしませてくれた。」(p.160)。つまり、シュバイツァーの診療所を訪ねる前に報道班は、ガボンの都市に住む人々の生活程度を目撃し、「この黒人たちは、みんなのびのびとくらしているらしいね」(p.160)という感想まで抱いている。だが、放送された番組に上記の事柄は一切盛り込まれていない。

こうした違いは、番組の編集や構成に報道班が一切関わっていないということに起因すると考えられる。実は『放送文化』24巻10号(1969:54)の座談会において他の参加者(A)と豊原記者(B)の間で次のようなやりとりがある。

A「あれ(筆者注:「アフリカ大陸に行く」)は豊原さんが帰る前に、全部放送が終わって

2 以下、NHKTV番組「アフリカ大陸に行く」の台本からの引用については(第〇集:ページ数)、書籍『アフリカ大陸に行く』(NHK特別報道班、1960)からの引用については(p.ページ数)と表記する。

たんじゃないですか」

B「そうなんです。いまと違いまして、僕らが発出している間に受入れ班が発足して、帰った日に放送は終わっていました」

つまり、海外初取材番組という冠を付して放送された「アフリカ大陸に行く」は、アフリカから送られてきた映像を用いてNHKの「受入れ班」が制作した番組だということである。おそらく「受入れ班」とは番組の編集や台本の作成に携わった番組スタッフのことであろうが、その実体は今となってはわからない。番組の台本に名前が記載されたスタッフ以外の人物が何らかのかたちで番組制作に関与していた可能性もある。したがって、「受入れ班」についてこれ以上議論することは、あまり現実的とは言えない。むしろ重要なのは、「アフリカ大陸に行く」が報道班の見たアフリカの姿そのものを放送したわけではないという点である。となれば、『放送文化』16巻8号（1961：6）で佐野カメラマンが言った「われわれの撮影したフィルムなり録音テープが東京へつくかどうか、初めてのケースですから非常に心配しました。フィルムを現地の航空会社に持って行って、自分の手から放すときのやる瀬ない気持……。笑」というのは、フィルムの輸送についての不安だけでなく、試行錯誤の末に撮り終えたフィルムの編集を国内のスタッフに一任せざるをえない状況も述べていると見ることができる。

いずれにしても我々がここで目を向けるべきは、TV番組の制作事情ではなく、報道班が取材した映像をもとに国内のスタッフによって制作された「アフリカ大陸に行く」と番組の反響を受けて報道班が帰国後に執筆した『アフリカ大陸に行く』の違いである。次節で両メディアにおける言語表現の特徴を分析し、それぞれの描くアフリカの表象のありようを把握するための手がかりを得ることとする。

3. ふたつの〈アフリカ大陸に行く〉にみる言語表現の相違

筆者らは、NHKアーカイブス学術利用トライアルの2016年度第2回で「アフリカ大陸に行く」を視聴し、第1、2、3、5、6集の台本を入手した。前述のように第7集以外は番組の音声が残存していないため、この台本が当時放送された「アフリカ大陸に行く」の内容を知る唯一の資料である。本節では現存する台本と1960年に刊行された『アフリカ大陸に行く』を比較し、両者における言語表現の違いを整理する。

まず、両者の違いとして目を引くのは人称である。両者とも様々な主語が登場するが、象徴的なのは一人称複数形の「わたくし」である。書籍では「わたくしたち」は頻繁に使用され、書き手である報道班の体験や心情が述べられている。これに対しTV番組では「わたくしたち」は用いられず、報道班とそのメンバーを主語にした文がナレーションで読み上げられる。

たとえば【図2】は、ベルギー領コンゴで住宅地を訪れた報道班の様子を映した映像である。この映像には「報道班はこゝでもすぐに子供たちと仲よくなりました。佐野カメラマンは真

黒に陽焼けして子供たちといゝ勝負」(p.29-30)、「豊原山下二人の記者も子供たちに囲まれて取材は一時中止 報道班はどこへ行っても子供には人気があります」(p.30)というナレーションが入る。【図3】は、カメルーンの動物保護地で木の展望台にのぼる山下記者を映した映像である。「山下記者は諦め切れずに高い所から見渡しましたが、象の姿はどうしても見当たりません」(p.24)というナレーションが説明するように、番をはったものの猛獣や象を撮影できず気をもむ報道班の様子が番組で紹介されている。



【図2】ベルギー領コンゴでの報道班



【図3】カメルーンの動物保護地での山下記者

一般に書記言語には「太郎は言いようのない怒りを覚えた」のように三人称の主語の心情や見解を書き手があたかも神のごとく見透かして記述する方法があるが、『アフリカ大陸に行く』は、これに該当しない。むしろ、TV番組の「アフリカ大陸に行く」のナレーションが報道班や現地の人々を主語に据えた文を用いることで全知全能の神のような目線でアフリカを伝える。たとえば、①②③は第2集のエチオピアの台本に記載されたナレーションである。

- ①報道班一行は、アジスアベバ滞在中の一日、ジュベリー宮殿を訪れました (p.13)
- ②ガラ族の人たちが一番いやがる写真の撮影をやっと納得させてくれました (p.29)
- ③教育程度が低いため、この国が近代国家に生れ変わるのにはまだかなりの年月がかかりそうです (p.37)

①は事実だけを述べた文であり、ナレーションの視点は中立の立場にある。②は「くれる」を用いて撮影許可の希望がなかった報道班の側にナレーションの視点が置かれている。③はエチオピアの今後について推量したもののだが、推量の主体を明示しないことで推量した内容が断定に近い効果で提示されている。

このようにTV番組の場合、ナレーションの人称が自在に変わることによって、報道班の一人称で語られたアフリカとは違うアフリカの表象が視聴者に伝えられることになる。つまり取材を続ける報道班による一人称からTV番組における三人称への転換は、報道の客観性を担保するものではなかったということである。

また、TV番組と書籍における文体の違いにも注目しなければならない。TV番組の「アフリカ大陸に行く」の台本では丁寧体、書籍の『アフリカ大陸に行く』では普通体が用いられている。たとえば、エジプトへの出発について台本には「一行は先ず 先月十八日 ローマから最初の訪

問国アラブ連合共和国に向かいました」(p.1)とあるが、書籍には「アラブ連合のエジプトへ向けて、ローマの飛行場を飛びたつたのは、十一月十八日の夕方であった。」(p.22)とある。また、エチオピアの首都アジスアベバについてTV番組のナレーションは「アジスアベバとは「新しい花」という意味でその名の通り、バラ、カンナ、ケシ、タンポポなど美しい花が一年中咲くところに咲いています」(p.7)と述べているが、書籍では「一年じゅう、十四、五度の気温にめぐまれ、ちょうど日本の春のような快適な気候の土地である。」(p.38)となっている。書籍は普通体を用いることで報道班の独白的な色彩を濃くし、報道班の目線にとらえたアフリカを描いている。これに対しTV番組のナレーションでは対象敬語である丁寧体を一貫して使っていることから、視聴者の存在を強く意識していたことがうかがえる。

TV番組において視聴者が重要な存在、というより欠かせない存在であったことは、ナレーションにおけるコ系の指示詞の使用からもわかる。TV番組は映像を介して放送する側と視聴者が同じ時間を共有するわけだが、それをうまく活用しているのがTV番組のナレーションにおけるコ系の指示詞の使用である。「この教会は宗教建築家として知られるロジア・エレルの建てたもの」(第5集：44-45)、「これはまた威勢のよい洗濯風景 力のこもったアフリカ式クリーニングです。」(第6集：28)のように、コ系の指示詞は映像の切り替えに対応するナレーションで使用される。特に使用頻度が高くなるのは、ケニアのナショナル・パークやカメルーンの市場のように視覚的に映えるもの——ケニアの場合はナショナル・パークの野生動物、カメルーンの場合は市場で売買されている品々——が立て続けに画面に登場する場合である。

指示詞とは「いま・ここ・私」を基準にして意味内容となる対象を照応する直示 (deixis) 表現である。その中でもコ系の指示詞は、話し手と聞き手と対象の三者の距離感が近い場合に用いられる。TV番組の場合、放送される映像のなかに指示詞が照応する対象が存在するため、番組のナレーションで用いられるコ系の指示詞は、視聴者を画面に注目させる、あるいは番組に集中させる役割を担う。これは、書籍におけるコ系の指示詞が、先行の文脈の中にある対象を照応する役割とは明らかに異なる。

このように、視聴者ありきでTV番組が制作されたことを示唆する丁寧体や指示詞の使用に注目すると、番組の制作陣にとって視聴者が既に有していたアフリカについての知識や理解は番組の制作において無視することのできない前提であり、それがTV番組におけるアフリカの表象の基盤となったと考えられる。

そして、TV番組にせよ書籍にせよ、アフリカの表象の中身を構築するのが、そこで取り上げられた話題である。たとえば中央アフリカ共和国は、TV番組も書籍も報道班がバンギ空港で盛大な出迎えを受けた話題からはじまる。書籍にはこう書かれている。「わたくしたちは、いきなり、十人あまりの黒人やフランス人の包囲をうけ、どぎもをぬかれた形であった。」(p.152)。「出むかえの人々の紹介をうけてみると、官房長官や情報部のお役人、フランス人の副高等弁務官は別としても、観光会社やレストランの経営者までまじっているのには、これまた、いささか

どぎもをぬかれた形であった。」(p.153)。同じようにTV番組の台本も「賑やかな出迎えにすっかり面喰いました」(p.34-35)と報道班たちの驚きを伝えている。なぜ盛大な歓迎を受けたのか。『アフリカ大陸に行く』はその理由をこう説明する。「この国が観光を大きな売物にしているからであった。」(p.153)。TV番組も同様である。「この国は観光宣伝に力を入れていますので報道班に大いに紹介してもらおうという訳です」(p.35)。しかし、ここから先、中央アフリカ共和国に関する話題は次の表でまとめたようにそれぞれ展開される。

TV番組	書 籍
① 報道班の移動・歓迎の様子	① 報道班の移動・歓迎の様子
② バンギの街	② バンギ(漁)
③ 夜のダンスホール	③ 観光地としての様子
④ ウバンギ河の漁	④ 報道班のために催された現地の踊りとカヌーレース
⑤ 観光に利用される沼地	⑤ ピグミー族の部落
⑥ ピグミー族の部落	⑥ 観光政策
⑦ 報道班のために催された現地の踊り	⑦ 夜のダンスホール
⑧ カヌーレースの様子	
⑨ 自治共和国としての独立事情	

TV番組では他の放送回と同様、首都である街の様子を紹介した後、観光とは違う日常の様子としてバンギ河の漁を取り上げ、国策として観光に利用されている諸々を紹介し、最終的に「フランスからの完全な独立ではなく、フランスの指導で、国を発展させること」(p.46)を望んでいるという説明で締めくくられる。一方、書籍はバンギの街にあるダンスホールの場面で、こう結ぶ。「独立まえまでは、タムタムに合わせて、裸で踊っていたというこの国の黒人たちも、いままでは、マンボやチャッチャッチャにに合わせて、ハイ・ライフを踊っているというわけである」(p.158)。つまり、TV番組では国の発展のために観光政策に力を入れる中央アフリカ共和国の姿が浮かび上がり、書籍の方では観光政策を中心にヨーロッパ化が進む中央アフリカ共和国の姿が浮き彫りになるのである。

こうした話題の展開の違いが際立つ例として、第1集のエジプトも取り上げたい。エジプトの場合、TV番組も書籍も近代的な建築物と古代の遺跡が混在するカイロの様子からスタートする。その後、TV番組は、近代化のただ中にあるエジプトの諸相を映し出していく。そして、冷凍工場に指導にあたる日本人技師を紹介し、エジプトの近代化が日本をはじめとした先進国のもとで進められていることを伝える。アスワンハイダムの建設、開拓村での整地作業、井戸掘り、農業など、TV番組は次々と新しいエジプトの姿を伝える。こうしたなかで次の表にあるTV番組の⑩のルクソン遺跡の話題は異質に思えるが、「ここは古代芸術をそのまま残した自然の大博物館といえましょう」(p.33)とナレーションが言うように、観光の名所として生まれ変わった遺跡の

様子が伝えられる。

TV番組	書 籍
① カイロの街（高層ビル、ピラミッド）	① カイロの街（高層ビル、ピラミッド）
② スエズ運河	② 情報局の役人が同行する取材
③ 冷凍工場（技師として働く日本人）	③ 砂漠を開拓した農地
④ 製鉄所	④ 冷凍工場（技師として働く日本人）
⑤ アスワンへ移動するための自動車	⑤ 製鉄所
⑥ 砂漠（ラクダ）	⑥ アスワンへ移動するための記者
⑦ ナイル河	⑦ アスワンダム・アスワンハイダム
⑧ アスワンダム・アスワンハイダム	⑧ ルクソン遺跡
⑨ ナセル大統領の演説	⑨ ナセル大統領への取材の変更
⑩ ルクソン遺跡	⑩ ナセル大統領の演説の取材
⑪ 砂漠の舗装道路	⑪ 日本のTV局による取材の現状
⑫ 開拓村	

一方、書籍はTV番組とは全く異なる内容である。もちろん、新旧が混在するカイロの発展やナイル河、日本人が活躍する冷凍工場、アスワンハイダム、ルクソン遺跡などの話題などは取り上げられているが、TV番組では報じられなかった取材事情が明かされることで、TV番組とは異なるエジプトの姿が描かれている。たとえば、表中の書籍の②は情報局の役人が「ご自慢のところを大いに宣伝し、見せたくないところは、TV映画のフィルムにとられないように監視しようという魂胆から」（p.25）取材に同行したという裏話である。また、⑨のナセル大統領への取材の変更も、汽車の大幅な遅れが原因であると説明されている。このように、書籍ではエジプトの近代的な発展に触れる一方で、未だ近代化されていない部分についても言及しているのである。

しかし、書籍はこれで終わらない。現地TV局の開設をめぐる建設契約を日本が先に申し入れたにもかかわらず、アメリカに横取りされたという話題でエジプトの章を閉じる。そして、「政府のバック・アップの弱い国ではどうすることもできない、というのが実情のようであった。」（p.32）と日本の実情を嘆いている。つまり、書籍では日本の制度や社会に対する報道班の問題意識も述べられているのである。

前述のように、視聴者が有しているアフリカについての知識や理解を前提にTV番組が制作されたとすれば、TV番組が紹介した近代化に向けて様々な変化を遂げているエジプトの姿は、既に視聴者がある程度思い描いていたものということになる。しかし、報道班が現地で取材したエジプトの現状は、それにおさまるものではなかった。そこで報道班は、自分たちの一人称で書くことが許された書籍のなかで、TV番組に取り上げられなかった話題をはじめ話題の展開を設定し直し、アフリカだけでなくアフリカから見た日本の問題点も浮き彫りにした。

だが、そうであるとすれば、報道班の側にはアフリカに対する一定の知識や理解に基づいて描

こうとしていたアフリカの姿が現地での取材を始める前から既にあったと考えるべきだろう。実は報道班は自分たちがそうしたものを既に用意していたことを隠していない。『アフリカ大陸に行く』のあとがきの一文が、このことを物語る。「出発前に眼を通してきた数冊のアフリカに関する書物が、時には全く役にたたなかったと思われるほど、いまのアフリカはめまぐるしく変化し、日進月歩の勢いで躍進しているといえよう」(p.254)。

つまり、現地に赴く前に報道班が有していたアフリカについての知識や理解は、「アフリカ大陸に行く」の視聴者の側にあるそれとそう変わりなかったと考えられる。では、その中身はどのようなものであったのだろうか。第4節で詳しく論じることにする。

4. アフリカに対する基本的な認識のフレーム:教科書を手がかりに

アフリカ大陸を取材した報道班、報道班の映像を用いて「アフリカ大陸に行く」を制作した「受入れ班」、そして受け手——「アフリカ大陸に行く」の視聴者と『アフリカ大陸に行く』の読者——が共有していた、アフリカについての知識や理解とは、どのようなものだったのか。ここではそれを、小学校や中学校での歴史や地理の教科書を中心とした、当時のアフリカに関する文献を手がかりに整理する。

戦後におけるアフリカに対する知識や理解の特徴を際立たせるために、戦前の小中学校における歴史や地理の教科書での記述に触れておく(坂口 1913, 高橋 1932, 初等教育研究会 1932)。戦前の記述に見られる特徴は、ヨーロッパからの視点に基づいてアフリカが記述されていることである。戦前の歴史の教科書にアフリカが登場する場合、「列強」が活動した舞台として登場することが多い。ここでいう「列強」とはイギリス、フランス、ドイツ、ベルギーといったヨーロッパ諸国である。そしてこれら「列強」が進出する以前のアフリカは、「暗黒大陸」であったとされる。それが19世紀半ばのデイヴィッド・リヴィングストンやヘンリー・モートン・スタンリーの「探検」によって明るみに出され、列強による「分割」の舞台となっていく。地理の教科書もこうした歴史の記述と対応している。つまり、ヨーロッパからの視点に基づいてアフリカの地理が記述される。典型的には、アフリカ大陸は「久しく暗黒大陸として、文化進まずにあった」(高橋 1932: 533)とされ、その理由として、海岸線が単調で半島や湾や島が少なく、しかも海岸沿いには疫病地域も多いため海上の交通が発達しなかったこと、内陸が全体的に高地で、気候の厳しい砂漠や大森林、そして大瀑布が多く、海岸近くで河川が急になるため交通に適さないことが挙げられている。独立国は、エジプト、アビシニア(エチオピア)、リベリアのみで、それ以外はイギリスやフランスなどの「欧州諸国の植民地」であり、それらはいよいよヨーロッパのどの国の植民地であるかという観点から分類される。イギリスの勢力下にあるエジプトや南アフリカ、フランスの勢力下にあるアルジェリア、ベルギーの勢力下にあるコンゴといった具合である。なかでも比較的詳細に取り上げられるのは、やはり「列強」との関わりが深い地域や事象で

ある。国としてはとりわけエジプトや南アフリカであり、場所としてはナイル川やスエズ運河などである。以上のことは、教科書の図表にも見て取れる。人物の肖像は、主にアフリカに関わりの深いヨーロッパ人のものであり、アフリカは主に地図として登場する。なお、野口英世を「日本人の誇り」（池田 1934：1）とする著書もすでに見られる。

戦後のアフリカに関する記述は、ある点で戦前の記述を踏襲しており、ある点で戦前の記述と違っている（平凡社編 1948, 東京社会科教育研究所編 1948, 社会科教育研究会編 1949, 広島図書株式会社 1949, 徳山・朝倉 1952, 世界文化画報社 1953）。

戦前を踏襲しているのは歴史に関する記述である。戦前に比べれば詳しくなっているが、議論の骨格はさほど変わっていない。エジプトに代表される地中海側の北アフリカは、ヨーロッパ等との接触もあって早くから開けたが、それ以外の「大部分は暗黒大陸の状態にあった」（広島図書株式会社 1949：22）とされる。ヨーロッパがインドとの航路を開くなかで、アフリカ南端の暴風岬（喜望峰）が発見され、「黄金や象牙、穀物、胡椒等の貿易や奴隷の売買」が行われ、17世紀半ばから「列強の植民地開発」が盛んになっていく。18世紀末から19世紀末にかけての「探検家時代」に内地の解明が進み、以後は「列強の分割時代」に入る。なかでも南アフリカを舞台とした植民地争いは激しいものであった。独立国は、エジプト、エチオピア、リベリアのみであるが、エジプトはイギリスの勢力下であり、エチオピアは安定しない封建国家で、リベリア共和国はアメリカの解放奴隷によって建国されたものである。それでも「近年主に白人によって未開のアフリカも段々開けつつあり」（広島図書株式会社 1949：24）り、鉄道や自動車網、海外との定期航路も充実しつつある。産業は農業中心で、綿や椰子油、ココアやゴム、コーヒーなどが知られている。ほかにダイヤモンドや金なども産出される。「このように色々と資源を持つアフリカでは黒人も僅かずつ乍ら進歩を示している」（広島図書株式会社 1949：24）と言われる。

歴史に比べて、地理に関する記述には少なからず変化が認められる。あからさまにヨーロッパとの関係に基づいた記述が減っていき、アフリカの位置や面積、地形や気候、植物や動物、住民や政治、産業や交通など広いテーマに関する解説が詳細になっていく。そのことは、それぞれのテーマに関わる写真や地図、絵などが数多く掲載されるようになった点に象徴的に見て取れる。以下、記述の一部をまとめておこう。アフリカの気候は、赤道を中心に4分の3が熱帯という南北対称形をしているが、北半分は面積が広くて大陸性気候であり、南半分は海洋の影響で雨が多い。そのため南は北よりも植物が多く、カラハリ砂漠はサハラ砂漠よりも小さい。北アフリカやサハラ砂漠には、ラクダやカモシカやキリンなどが生息しており、赤道直下からカラハリ砂漠にかけてはカモシカやキリンのほかに、ゴリラやチンパンジー、カバやオカピ、ゾウやライオン、シマウマやハイエナ、ワニやフォッサなどが生息している。「アフリカの土人」は、ヨーロッパ人やアラビア人の影響を受けた北部の「ヨーロッパ系」と、中部および南部の「純粹のアフリカ土着民」とに分けられる。前者は「或る程度の文化を持ち、未開人と呼ぶのはふさわしくない」が、後者は「未開人と呼ばれて然るべき生活をして」いるとされる。後者には「ブッシュマン」

や「ホッテントット」、「マサイ族」や「ピグミー」などが含まれる。食糧は採集や「幼稚な」農業によるものが多く、住居は簡素で、奥地に行けば裸に近い生活をしている。社会生活としては、国家の存在しない部落単位の生活、あるいは、複数の部落が集まった部族単位の生活が一般的である。精神生活ではアニミズムが多く、イスラム教やキリスト教、ユダヤ教の信者もいる。風習としては、「奇妙な首飾りや耳飾」をつけたり、額に重いモノを載せて運んだり、「唇に板をはめ」こんだり、珍しい「成人の祝」、食人などがある。だが「一般にアフリカの未開人といえは極めて能力の低い幼稚なものと考えられがちであるが、実際には必ずしもそうではない」（東京社会科教育研究所 1948：82-84）。奴隷としてアメリカに売られた「ニグロ」のなかには「近代的な大学教育」を受けて才能を発揮している者もいるし、ヨーロッパとの接触のなかで農業や工業も発展しているなど、「種族の素質としては秀れた点をもっている」。「ただ彼等は生活の容易な環境にあるためか、・・従順で生活に積極性が乏しく、また「風土が異なるために生活様式も異なりそれが文明人の眼には奇異な或いは劣ったものようにみられるのである」。

こうした戦後のアフリカに関する記述は、1950年代半ば頃からさらに大きく変わり始める（藤岡・辻田 1954, 山鹿ほか 1957, 日本ユネスコ国内委員会 1958, 山本 1956, 小山・香川 1958, 西村 1958, 世界文化社 1961, 全国学習活動研究会編 1961, 小山・倉富 1964）。その変化を顕著に示すのが、「暗黒大陸」という言葉の位置づけ方である。従来の記述では、アフリカが「暗黒大陸」であることが自明の事実として扱われていた。ところが1950年代半ば頃からは、次のような記述が目につき始める。「西洋人はこれを暗黒大陸とさえ呼んでいた」（藤岡・辻田 1954：78）。あるいは「ヨーロッパの人々にとってなぞの地方でしたから、暗黒大陸とよばれました」（山鹿ほか 1957：2）。これらの記述では、「暗黒大陸」というアフリカに対する呼称が、普遍的な事実ではなく、ヨーロッパの人々の視点に基づいた記述であると明言されている。さらにそれだけでなく、「暗黒大陸」という言葉の意味の変更を迫るかのような説明も見られる。「人類最初の文明を生んだアフリカは、ながいこと、ヨーロッパの国々に支配されて、暗黒の時代をおくりました」（世界文化社 1961：3）。ここでは、むしろヨーロッパ列強に支配された時代こそが「暗黒の時代」であった、とされている。「暗黒」の意味が180度変わっている。最後に次のようにも言われる。「アフリカが、暗黒大陸とよばれていた時代は、もう、おわってしまいました」（世界文化社 1961：12）。あるいは「原住民の文化程度や生活水準は最近きわめて高くなり、今日では『暗黒大陸』という名前は全く通用しないようになった」（藤岡・辻田 1954：85）。ここで言う「暗黒大陸」が、ヨーロッパとの接触以前のことなのか、それとも以後のことなのかは、わからない。いずれであれ、アフリカが「暗黒大陸」と呼ばれていた時代は終わった、と語られ始めるのが、1950年代半ば以降である。

戦後直後と対比させて言えば、「暗黒大陸」という言葉の変化が示唆しているのは、歴史に関する記述が変化してきた、ということである。事実、1950年代半ば以降の地理に関する記述は戦後直後とそう大きく変わらない。地形や気候の基本的な情報に基づいて、ジャングルやサバンナ

や砂漠といった分類と、そこで生活する動植物の解説がなされている。アフリカに暮らす住民としては、「黒人」のほかに、「ハム族」や「セム族」、ヨーロッパ人、インド人などがいるとされる。「黒人」の分類として、「スーダン・ニグロ族」や「バンツー・ニグロ族」、さらには「ピグミー」や「ブッシュメン」などが挙げられており、簡単な服と家で暮らし、採集や農耕によって生活しているとされる。こうした地理的ないし空間的な記述に比べると、歴史的ないし時間的な記述には相対的に大きな変化が見られる。それを象徴するのが次のような記述である。「最近アフリカの開拓はめざましくすすんできました。またアフリカの人々がめざまして、自分たちの国を立て、また、発展させようとする動きが強まっています」（山鹿ほか 1957：2-3）。ここではアフリカの歴史に、新しい段階が付け加えられている。ヨーロッパからの「独立」と「発展」である。そしてこうした記述は、たいてい過去の書き換えを伴っている。たとえば次のような具合である。「ヨーロッパ人がはいつてきて黒人は征服され、その下で使われるものも多くなりました。また、ヨーロッパ人は、酋長たちをだまして、安っぽいガラス玉や、悪いお酒、ピカピカしたシンチュウの首かざりや腕輪など、黒人の珍らしがるものとひきかえに黒人を買いつめ、どれいとしてアメリカなどに送りました」（山鹿ほか 1957：13）。かつては「暗黒大陸」たるアフリカを開いていったのがヨーロッパだとされていた。しかしここでは、そうしたヨーロッパの進出が「征服」にほかならず、探検家の時代以降、象牙や黄金の売買から黒人の奴隷化、さらには黒人の労働者を使った「ヨーロッパ人のための産業」の興隆や資源の開発が行われてきた、とされている。ヨーロッパ列強に支配された時代こそが「暗黒の時代」であったとする、先の「暗黒時代」の書き換えに対応する記述である。こうした過去の書き換えによって、先に見た「独立」と「発展」の意味が確定される。すなわち、アフリカ諸国に「暗黒時代」をもたらしたヨーロッパの支配に対して、各地で「独立運動の火の手があが」っており、その結果、イタリアからリビアが、フランスからチュニジアやモロッコが、イギリスからガーナ国が独立し、エチオピアはエリトリアと連邦をつくり、エジプトはスエズ運河を自分のものにした。まだヨーロッパの植民地は多いが、今後も続く各国の独立によって「アフリカの地図はまだどんどんかわろうとして」おり、「アフリカの人々の生活や文化も次第に高められてい」とされる（山鹿ほか 1957：18）³。なおこの時期以降、従来のような珍しい動植物や風習に関する写真とともに、アフリカ各地のビルや工場や学校、および、そこで働いたり勉強したりしている人々の写真が登場してくる。

3 同時代の社会科の教科書を分析した日本ユネスコ国内委員会（1958）は、アフリカの記述に関し、「原始的な生活からかなり近代的な生活にいたるまでの多様な原住民の生活様式が広いアフリカ大陸に混在しているという事実について、十分に叙述されていない。いわばアフリカについては、好奇的な眼などで物を見ているという傾向が強い」（日本ユネスコ国内委員会1958：32）と批判している。こうした批判が現れてくるのがこの時期以降である。ただし興味深いことことに、そうした批判の直後に、「未開民族の知的能力の低さ」（日本ユネスコ国内委員会1958：33）といった記述も登場する。

以上を整理すると、「アフリカ大陸に行く」や『アフリカ大陸に行く』以前の日本で広く流通していたアフリカについての知識や理解は、次のようなものであったと言える。すなわち、アフリカは「古代文明」の栄えた一部の地域を除いて長らく「未開」の状態にあり、「野生」の動植物の豊かな土地であるとされてきたが、19世紀からヨーロッパの「植民地」になり、近年では「近代化（発展）」も進み、ヨーロッパに対する「独立」の動きが盛んになりつつある、というのがそれである。アフリカについてのさまざまな知識や理解をゆるやかに組織化している、「古代文明」、「未開」、「野生」、「植民地」、「近代化」、「独立」をキーワードとする前提的な枠組ないし骨組を、ここではアフリカに対する基本的な認識のフレームと呼ぶことにする。

こうした基本的な認識のフレームを考察に組み込むことで、3節で述べた「アフリカ大陸に行く」と『アフリカ大陸に行く』の違いはどのように解釈できるのか。次節では、報道班、「受入れ班」、受け手の関係に注目しながら、「アフリカ大陸に行く」と『アフリカ大陸に行く』が生み出されたプロセスを再構成することにより、両者の内容上の相違をさらに子細に検討する。

5. フレームとふたつの〈アフリカ大陸に行く〉

「アフリカ大陸に行く」や『アフリカ大陸に行く』が作成される以前の時点では、報道班、「受入れ班」、受け手という3つのアクターは、アフリカに関して相互にそれほど変わらない知識や理解を有していた。4節で述べた、アフリカに対する基本的な認識のフレームがそれである。

このうちの報道班が、「アフリカ大陸に行く」の制作のために、日本を離れてアフリカ諸国を周遊する。その際、報道班は、みずから多くの日本人々と共有する認識のフレームに対し、独特のスタンスを採っていた。そのことは、『アフリカ大陸に行く』の冒頭に置かれた、出発前の様子を記した次の文章に端的に表れている。「独立新興国の姿を伝える映画、書籍、あるいは報道記事など数えきれないほど世界にハンランしているが、わたくしたちは自分の目で見、耳で聞いたままを日本人々に伝えたいと心からねがっていた・・・わたくしたちは、なによりも、現実のアフリカの姿をとらえ、黒人の生態——とくに風俗、習慣といったものをただしく伝えたいものだと話し合った」(p.21-22)。当時、アフリカ諸国の様子を伝える「映画、書籍、あるいは報道記事」は、「数えきれないほど世界にハンランしてい」た。報道班も「数冊のアフリカに関する書籍」に「出発前に眼を通してきた」。ただし報道班は、そうした「世界にハンランしている」情報を鵜呑みにはしない。むしろ、基本的な認識のフレームから一定の距離を置こうとする。すなわち報道班は、自らを含めた多くの日本人々が持つフレームとは違った、「自分の目で見、耳で聞いたまま」の「現実のアフリカの姿」を、「日本人々に」「ただしく伝えたい」と願って取材に出発したのである。そして帰国後報道班は、「現実のアフリカの姿」をある程度知ることができた、という趣旨の感想を『アフリカ大陸に行く』の「あとがき」で述べている。すでに引用した一文だが、前後の文章と合わせてあらためて引用しておこう。「それにして

も、いかにアフリカ概念が日本にあやまって伝えられていたかを、身にしみて感じてきた。出発前に眼を通してきた数冊のアフリカに関する書籍が、時には全く役にたたなかったと思われるほど、いまのアフリカはめまぐるしく変化し、日進月歩の勢いで躍進しているといえよう。この報告が、いまのアフリカの認識に僅かでも役立つならば幸いである」(p.254)。出発前の情報が「全く役にたたなかった」とか「いかにアフリカ概念が日本にあやまって伝えられていたかを、身にしみて感じてきた」という表現により、自分たちの得たものが世の中で氾濫するアフリカに対する認識のフレームとは少なからず違った「現実のアフリカの姿」であると示唆されている⁴。

報道班はそうした「現実のアフリカの姿」をできる範囲で映像に収めたはずである。だが、その映像がそのままの形で「日本の人々」に伝えられたわけではない。報道班の映像は、すでに述べたように、報道班の手を離れて飛行機等で日本へと送られ、「撮影したフィルムが到着しだい東京で編集して」(p.408)、TVの前にいる視聴者に届けられた。この「受入れ班」による編集の過程で、報道班の言う「現実のアフリカの姿」は一定の変形を被ったと思われる⁵。ではどのような変形を被ったのか。「受入れ班」の編集方針について明言している記述はない。だが3節で検討したように、視聴者ありきで制作されたTV番組「アフリカ大陸に行く」は、報道班の撮影した「現実のアフリカの姿」を、4節で述べたアフリカに対する基本的な認識のフレームに近い形へと編集したものであったと考えられる。

実際、「アフリカ大陸に行く」の内容は、アフリカに対する同時代の基本的な認識のフレームから大きくは外れていない。以下、「古代文明」、「未開」、「野生」、「植民地」、「近代化」、「独立」というそれぞれのキーワードに即して、「アフリカ大陸に行く」の内容を紹介する。

「古代文明」の映像は、とくにエジプトの回に見られる(【図4】)。「ギザのピラミッド」は、海外からの観光客だけではなくエジプトの人々にとっても行楽地になっているとされる(第1集:6-10)。また「ル



【図4】エジプトのピラミッド

4 もちろん報道班は慎重な但し書きをつけている。「広いアフリカを4ヶ月足らずで一周したのだからまさに駆足旅行で、その上わたくしたちの不勉強もあって、粗雑な内容しか伝えられなかったことを深く恥じている。しかし、一人旅ではなくつねに三人の目と耳で体験したものを、三人で論じあい少しでも現実のアフリカの姿を伝えようと、最善の努力をはらってまとめあげたつもりである」(p.253)。

5 『放送五十年史』は「アフリカ大陸に行く」に始まる「海外取材番組」を次のように位置づけている。「テレビは、大衆が気軽に楽しめる娯楽番組や日常生活に役立つテーマを取り上げる一方で、社会の抱える問題を追及し、また広く海外の実情を伝えて、視聴者とともに考える番組を次々に登場させた。……16ミリカメラの機動性とフィルムの記録性を生かして、テレビ番組としての新しい分野を開いたのがNHKのテレビドキュメンタリー『日本の素顔』であり、また、カメララボ形式による『海外取材番組』であった」(日本放送協会 1977: 407)。ここでいう「広く海外の実情を伝えて」という常套句をそれぞれのメディアがどのように理解しているのかは、興味深いテーマである。

クソルの遺跡」には、ヨーロッパ各地から多くの観光客が訪れ、古代エジプト王朝を偲ぶ様子が映し出される（第1集：29-33）。

「未開」に関わる映像の一番わかりやすい目印は、「未開（人）」や「原始（的）」といった語句である。代表的なのは、エチオピアの「ガラ族」（【図5】）とケニアの「マサイ族」（【図6】）の映像である。エチオピアで報道班が出会った「ガラ族」は、「ちぢれたかみの毛を羊の乳で作ったバターで光らせ、近代的なダムとは対照的な未開人そのまゝの姿」（第2集：25）だとされる。その後映像は「ガラ族の部落」に移る。光がわずかにさし込む「泥と牛のフンで固めた狭い家」（第2集：29）に住み、「わずかばかりの畠を耕したり、牛を飼ったりして生活」（第2集：32）している様子が映し出される。そして「ガラ族」のシーンは次のナレーションで締めくくられる。「アジスアベバからわずか百キロ位しかはなれていないガラ族の部落に残る暗黒大陸アフリカの姿をみて、報道班一行は



【図5】エチオピアの「ガラ族」



【図6】ケニアの「マサイ族」

宿舎にひきあげました」（第2集：33）。「ガラ族」の暮らしが「暗黒大陸アフリカ」の表徴とされている。なおエチオピアの放送回では、「ガラ族」だけでなく、エチオピア全体を「未開」とするナレーションが入る。「エチオピアは古い独立国ですが、国民は非常に貧しく、国民の生活水準は低く学校に行っている人も百人に一人という割合」であるとされ、とくに「歩く人間は殆どがはだし」であることに触れながら、「世界の文化から取残された大きな理由は食物をゆたかにみのらせる果物などの食糧と暖かい気候と外国との接触を阻んだ険しい地形にあるようです」（第2集：5）と説明される。またケニアの「マサイ族」は、「ケニアに住むアフリカ人」のなかで「一番どうもう」（第3集：12）であり、「いまでも頑固に西洋文明を拒んでいる種族で、洋服らしいものはほとんど身に付けず、昔乍らの風習に従って原始的な生活を営んでいます」（第3集：14）と紹介される。そして「マサイ族」も「暗黒大陸といわれたアフリカ」の表徴とされる。「暗黒大陸といわれたアフリカの歴史はここでは少しも変わっていません。白人に支配されることを嫌うマサイ族は、いまなお牛乳と牛の血をまぜたものを主食とし、原始時代を思わせるような家に住んでいます」（第3集：17）。これ以外にも、ベルギー領コンゴの首都「レオポルドビル」の郊外の市場では、マニョックや魚、子山羊のほか、乾燥したトカゲや亀の甲羅、猿の頭蓋骨といった「アフリカン・ドクターの魔法の材料」が売られており、「暗黒大陸時代の迷信はまだ根強くのこっています」（第5集：24-25）とされる。同じく「レオポルドビル」で見かけた、戸外で牛を解体する屠殺場も、「いかにもアフリカらしい原始的なやり方」（第5集：32）だ

とされる（【図7】）。

「野生」に該当するのは、動物や植物についての映像、とりわけナショナル・パークや保護区に関する映像である（【図3】）。たとえば、「ケニアを含めた東アフリカは、野生の動物が多いところで、ライオン、ヒョウなどの猛獣をはじめ、キリン、縞馬など、色々な種類の動物が広い草原や密林に住んでいます」（第3集：2）として、ナイロビ・ナショナル・パークが紹介される。ここで報道班は、ダチョウやヌーに



【図7】レオポルドビルの市場で牛を買った男性

始まって、キリン、ライオン、カモシカ、ワニ、カバといった動物に出会うが、たいていは人間をこわがらない、と説明される。そしてナショナル・パークのシーンは次のように締めくくられる。「ケニアにはこのような自然動物園が6つもあり、ここでは自然のままの動物の生態が見物人の目の前にくりひろげられています。赤道の太陽は草原に垂直に沈みます。動物を求めてあちらこちらと車を走らせた報道班一行は夕闇に包まれたナショナル・パークを後にしました」（第3集：12）。同じような映像は、他の回でも見られる。ただし、これらはケニアほどうまくいかない。たとえばカメルーンでは「広い地域をまる一日、あちらこちらとジープを走らせましたが、遂にライオンや象など、めざす動物には出会えず、残念乍ら撮影を断念、夕闇に包まれた保護地を後にしました」（第6集：25-26）とある。

「植民地」に関する映像は、今回検討した映像にはあまり登場しない⁶。たとえばポルトガル領のアンゴラの回で、人々は貧しく、しかし「全人口四百万人のうち、九割以上が読み書きできないため、アフリカ人たちは独立を求める民族主義運動も知りません」（第5集：5-6）と指摘することで、「植民地」の継続が示唆されている。

「近代化」に関わる映像の目印も、「未開」同様、「近代（的）」という語句である。エジプトの回では、カイロについて、「去年の二月エジプトとシリアが合併し、アラブ連合共和国になってからは、すばらしい高層ビルが立ち並び、一躍、近代都市に生まれ変わりました」（第1集：3）と紹介される。同様の表現は他の回でも登場する。「ケニア首都ナイロビは近代的なビルが立ち並ぶ整然としたイギリス風の街です」（第3集：43-44）とか、「ブガンダ政府の建物は、ク

6 もし南アフリカを取り上げた第4集の台本が現存していたら、ここでの「植民地」に関する考察は違っていたと思われる。『アフリカ大陸に行く』の南アフリカの章には次のような記述が登場する。「そのアフリカーナーは、わたくしたち日本人にたいし、一般の黄色人種とはちがった考えをもっていることはたしかだが、それとても有色人種の最高線というよりも、白人の最低線あたりに、日本人をいれているように感じられたが、これは日本人にとって、果たしていいことか、悪いことか—わたくしたちには判断できないが、彼等のとっている人種差別の観念には不快を感じないわけにはいかなかった」（p.92）。こうした報道班の記述がTV番組の「アフリカ大陸に行く」にも多少は反映されていたと推測できる。

リム色の近代的なビルディング」(第3集：32)、「近代的な建物が建ち並ぶルアンダの街」(第5集：7)といった具合である。これらのナレーションに見られるように、「近代(的)」という語がよく用いられるのは、ビルのような建造物に対してである。「近代(的)」と表現されない場合でも、いかにも「近代的」な建造物を取り上げることで、アフリカ諸国の「近代化」が示唆される。エジプトでは、スエズ運河の拡張工事や冷凍工場、製鉄所や発電所、アスワダムやアスワンハイダムであり、エチオピアでは、フランスの会社が作ったコーヒー園やイタリアの賠償で建設されているエチオピア初のコカダムや発電所である。これらが「近代化」の表徴であることは次のようなナレーションで指示される。「このような新しい工場を建設してエチオピア政府は近代国家に生まれ変わろうとする努力をつづけています」(第2集：23)。もちろん、建造物だけでなく、もう少し入り組んだ

「近代化」の映像も登場する。たとえば、エジプトの「タハリル県の開拓村」では、「四つの村」に「一万人が働いて」おり、「死の世界と云われた砂漠」に「人が住める村を造ろうと」、「機械の力で切り開き水を導」こうとしている様子が紹介される(【図8】)。「入植者にはモダンな住宅が当てがわれ



【図8】エジプトのタハリル開拓村

病院や学校の設備も備って」おり、「草一本なかったところに、青々とした木が整然と並んで」いたり、果樹園や養鶏場もあるとされる(第1集：33-43)。これ以外にも、観光客に慣れた「マサイ族」や「ピグミー族」という形で「近代化」が示唆されることもある。「ケニア政府は、このマサイ族部落を観光地の一つにして」おり、「そのためか一行を迎えた番兵もすっかり商売ずれががして、入場料をとってからはじめてカメラの前に立ってくれました」(第3集：13)とか、「この辺りに住むピグミー族は、観光客になれてしまっただけで気易くカメラの前に並んでくれましたが、すぐに金を要求します」(第6集：41)といった具合である。

「近代化」と並んで「独立」に関する映像も多く見られる。たとえばケニアでは、第二次世界大戦後、イギリスに対する不満が高まり、とくに「マウマウ団事件」以降、「ケニアの独立運動は、アフリカの新しい動きとして世界の注目を集めています」(第2集：45)と解説される。なかでも「『マウマウ団』という秘密結社を作り、七年前イギリスに反抗して暴動を起こした」「キクユ族」は、「マサイ族とは対照的に・・文化の程度も高く、数多いアフリカ人の中でも最もすぐれた種族」であり、現在は「一応、平和を保ってはいますが、一度燃え上がった民族独立への炎は、いまだにくすぶりつづけているようです」(第3集：18-22)と紹介される。この「キクユ族」出身の「黒人議員で独立運動の指導者」であるキアノ博士へのインタビューでは、「すべて白人が優先されている、今のケニアの法律には強く反対して」おり、「ケニアはアフリカ人のもの」という主張が紹介される(第3集：26-27)。こうした「独立の意気に燃えるケニア」と

合わせて紹介されているのが、「ヨーロッパ人だけが住むホワイト・ハイランド」である。「未開地を切り開いて育てあげたこの素晴らしい農地や牧場を白人たちが現地人に渡すことは、先ず考えられません」とされ、「現地人に比べ余りにも豊かな白人の生活はケニアの民族独立運動を煽る原因の一つになっています」（第3集：22-25）と解説される。ケニアとともに、独立への動きが烈しくなっているのがベルギー領コンゴである。ベルギー国王ボードワン一世によるコンゴ訪問に居合わせた報道班は、そこで次のような光景を撮影している。「沿道の歓声は白人の間からは『国王万才』。これに対してアフリカ人たちは口々に“独立”を叫び、国王を迎えるレオポルドビルの街は民族主義の嵐のなかに立つ、“ベルギー領コンゴ”そのままの姿です」（第5集：16）。そして「独立運動が盛んになってアフリカ人の鼻息も荒く、わがもの顔で街を練り歩きます。白人が支配する他のアフリカ諸国では一寸見ることができない風景です」（第5集：39）という解説がなされている（【図9】）。「独立」に向けた動きの最中にあるこれら諸国とはかなり色合いの違う解説をされているのが、すでに「独立」を遂げた諸国である。たとえばコンゴ共和国では、「長い間続いた植民地時代が終わりこの国では人種的差別もなくアフリカの人たちも立派な教会で祈りを捧げています」（第5集：45）とか、「東アフリカ諸国や、南アフリカ連邦ではスポーツといえば全く白人のものでしたがここでは選手も見物する人もアフリカ人ばかり。新興独立国コンゴの明るい姿です」（第5集：46-47）といった紹介がされている（【図10】）。中央アフリカ共和国でも同様の解説がなされている。「この中央アフリカをはじめ、かつてのフランスの植民地だった赤道アフリカでは、これまで活発な民族主義運動は、ほとんど起らず、四つの自治共和国に生れ変わった今日でも各国の指導者が望んでいるものは、フランスからの完全独立ではなく、フランスの指導で、国を発展させることです」（第6集：45-46）。そして「独立」の効果の一例として、「独立前まではタムタムと呼ばれる太鼓に合わせて、裸で踊っていたそうですが、独立後は裸で外出することを固く禁じられ、中央アフリカ共和国の若者たちは服装からダンスに至るまで、すっかり洋式になりました」（第6集：37-38）とされている（【図11】）。



【図9】ベルギー領コンゴの街を歩く人々



【図10】コンゴ共和国でのサッカーの合間の踊り



【図11】中央アフリカ共和国のダンスホール

「アフリカ大陸に行く」のなかで、アフリカに対する基本的な認識のフレームから外れている映像があるとすれば、それは「日本」に関するものである。代表的なのはエチオピアの回である。ハイレ・セラシエ皇帝の希望により、王室の離宮である「ジュベリー宮殿」で「エチオピア人の召使い」を指導する三人の日本人女性や、庭園造りを指導する日本人男性が登場する。「日本女性のこまやかな神経であれこれと面倒を見ている片山さんらは、エチオピア人のボーイやメイドたちにも慕われ、また皇后様の信任も大へん厚いということです」（第2集：15）。また、王宮近くの事務所でハイレ・セラシエ皇帝の相談役として働く「日本人顧問団」も登場する。「もう二年半もエチオピアに滞在し、経済、交通、その他いろいろな問題に亘ってハイレ・セラシエ皇帝の相談役をつとめています。池田さんたちはこれまで数多くの意見書や報告書を出しましたが、実行に移されたのはその中のごくわずか。顧問団が智慧を絞った名案も、資金がないため、大部分机の上の計画だけに終わっているようです」（第2集：19-20）。ほかにも、エチオピア政府とインド政府が共同で建造した、エチオピア初の紡績工場では、日本製の機械が据え付けられ、日本人技師がインド人やエチオピア人に機械の扱い方を教えている。また国連の世界保健機構から派遣されて、マラリアの研究をしながら学生たちを指導している大瀬博士などが登場する。「早く一人前に育て、自分たちの手でマラリアを防げるようにと教える博士は一生懸命です」



【図12】エチオピアの大瀬博士

（第2集：35）（【図12】）。「在留邦人」のほかにも、ケニアの回ではナイロビの「柔道クラブ」が登場する。アメリカ領事館の書記として日本に滞在し、講道館に2年間通ったというアメリカ人女性が始めたクラブで、道場はにわか作りだが、日本から取り寄せた教科書を頼りに、50人以上のイギリス人将兵が練習に励んでいると紹介される。

以上のような「アフリカ大陸に行く」の特徴は、次の4点にまとめられる。第一に、「アフリカ大陸に行く」の構成は当時一般化していたアフリカに対する認識のフレームとおおかた合致している。第二に、「アフリカ大陸に行く」は視聴者が有していたアフリカについての知識や理解に具体的な形を与える映像であった。従来、アフリカに関する情報は主に文字で与えられてきた。絵や写真が用いられる場合でも、すでに述べたように物珍しいものが被写体にされがちであり、普段の生活が被写体になることは珍しかった。「アフリカ大陸に行く」の映像は、アフリカの日常生活から物珍しいものまで幅広く撮影することで、視聴者が持っていたアフリカについての知識や理解を位置づける文脈を広げ、アフリカについての個々の知識や理解の解像度を上げる可能性を有していた。第三に、「アフリカ大陸に行く」は一括りにされがちなアフリカを国ごとに細分化する映像であった。同時代の社会科の教科書では、アジアやヨーロッパ、アメリカに比べてアフリカについての記述量はそもそも少なく、個別の国としてはせいぜいエジプトや南アフリカ連邦、そしてエチオピアが取り上げられるぐらいであった（日本ユネスコ国内委員会 1958：

5-6)。それに対して「アフリカ大陸に行く」では、すべての国々ではないとしても、また首都など一国内のごく限られた地域であるとしても、多くの国々が映像で紹介されている。第四に、「アフリカ大陸に行く」はアフリカにおける「日本」を映し出したという点で、アフリカに対する基本的な認識のフレームと異なっていた。基本的な認識のフレームでは、アフリカはアフリカ、日本は日本という形で相互に截然と区別されていた。これに対して「アフリカ大陸に行く」では、アフリカで居住する日本人や日本発祥の柔道が映像で紹介される。ただし日本人が登場する場合、その国の「近代化」の手助けをする「日本人」という形象に限定される。

そしてTV番組「アフリカ大陸に行く」の放送から数ヶ月後、書籍『アフリカ大陸に行く』が刊行される。『アフリカ大陸に行く』は「アフリカ大陸に行く」よりも後発だが、そこで書かれた内容が「アフリカ大陸に行く」のナレーションのもとになったことは疑いえない。同書の文章とほぼ同一の文言が、「アフリカ大陸に行く」のナレーションとして繰り返し登場するからである。とはいえ両者には違いがある。以下では、「アフリカ大陸に行く」との相違に焦点を絞って『アフリカ大陸に行く』の記述——つまり、報道班が記述した「自分の目で見、耳で聞いたまま」の「現実のアフリカの姿」——を整理する。

まず「古代文明」に関する記述は、『アフリカ大陸に行く』にはあまり登場しない。エジプトに関しても、アスワン・ダムやアスワン・ハイ・ダムを見た帰りに「ルクソル」の遺跡に立ち寄ったことが紹介されている程度である。

「未開」については、「アフリカ大陸に行く」との相違点として次の2点が挙げられる。第一に、『アフリカ大陸に行く』では、「未開」についての直接的な記述とともに、「近代化」のなかにあってそれを阻害している「未開」という記述が目につく。たとえば『アフリカ大陸に行く』のエチオピアの章では、「アフリカ大陸に行く」同様、「ガラ族」だけではなくエチオピア全体が「アフリカに取り残されたもっとも未開な国の一つ」(p.38)であるとされる。例証として、小学校から大学まで教育機関が揃っていて学費は国家負担であるという「わたくしたちから考えれば、夢みたいにありがたい話」なのに、「就学率は1パーセント」であり、大学生でも半数ほどしか「二桁のかけ算」ができないことや、「郵便配達制度も無く、新聞も、外人用のものがあるだけ、放送局も国営のものがあるにはあっても、聞く人はほとんどいない」こと、それでいて「『われわれは黒人ではない。三千年の歴史をほこってきた民族である』といった誇りをひけらかす」ことなどが挙げられている(p.38-40)。こうした事例を列挙したうえで、報道班は次のように言う。「こういった国民をかかえては、いかに聡明なハイレ・セラシエ皇帝でも、エチオピア人の手だけで、この国の近代化をなしとげることは不可能であろう」(p.41)。ここでクローズアップされているのは、「近代化」のなかにながら、それを阻害しているエチオピア人の「未開」である。そのことは、『アフリカ大陸に行く』のエチオピアの章の冒頭に付けられた、「頭の弱いエチオピア人」という見出しが端的に表している。

第二に、「近代化」のなかの「未開」という記述を決定的にしているのが、アフリカ諸国で暮

らす「在留邦人」や「外国人」の言葉である。とりわけ「アフリカ大陸に行く」で登場した多くの「在留邦人」が、『アフリカ大陸に行く』のなかでは「アフリカ大陸に行く」とはかなり違った発言をしている。エチオピアに滞在する政治顧問団や日本人の女官は次のように述べている。「レベルのひくいエチオピア人では、どんなによいプランであっても、彼等自身の手で、それを実行にうつすことは不可能といった事情もあります」(p.42)。「いくつもの窓にかかっているカーテンを、一線にそろえておろすこともできない人たちがばかりですから」(p.47)。きわめつけは次の発言である。「『犬にもシェパードと雑種犬があるように……』とある在留邦人がいていた。『エチオピア人は根本的に知能程度のひくい民族であることはたしかです。聡明といわれる皇帝でさえ、日本人の中以下の知能程度なんですから、日本以外の外国顧問団でも、二年いるとあきれかえってしまいます』『それでいて気位ばかり高く、恩義を感じないことはおどろくばかりで、わたくしたち日本人で、被害をこうむっていない人は、恐らく一人もいな(い)んじゃないかと思えます』と別の在留邦人がふんがいていた」(p.48)。このように、「アフリカ大陸に行く」では、あたかもエチオピアの地に根付いているように思われた「在留邦人」の口から、次々とエチオピア人の「知能程度」の低さが語られる。あるいは、チャドの首都フォル・ラミーの市内に活気がない理由として、NHKの特約通信社であるAFP通信(フランス通信社)の記者の言葉が紹介されている。「元来、チャドの国民は、だいたいにおいて怠けものようです。その原因は、多分、天候と食料と水とにめぐまれているためではないか、と思えますね。ですから、こん後、この国の発展をはかるには、まず、こういった国民の生活態度から改善していく必要がある、とわたしは考えている」(p.151)。以上のように、「在留邦人」や「外国人」の口から「近代化」を阻害する「未開」が語られ、そこでは、「未開」の原因として、現地の人々の「知能程度」や「教育程度」、および、彼らが暮らす土地の豊かさや気候の穏やかさというレトリックが用いられている。

「野生」についての記述では、「アフリカ大陸に行く」以上に、「野生」の不在と呼びうる記述が顕著である。ケニアのナショナル・パークに関する記述にそれがよく表れている(p.60-62)。ナショナル・パークで自動車を走らせた報道班は、たしかにライオンやキリンや駱駝に出会う。だがあまりに遠く、また近づけた場合でも、自動車にも驚かずあまりに人に馴れていて、「その感じは全く野生の猛獣とは見えず」、「オりのない動物園といった感じをぬぐうことはできなかった」。「ライオンの生態を見るなら、上野の動物園のほうがまだだね」というのが、報道班の感想であった。同じく、池でカバを見ようとしても鼻先以外は見えず、ひなたぼっこをしているワニは、いくら待ってもピクリとも動かない。「『動いてくれなくちゃフィルムにならない・・・』とわたしたちは、変に腹だたしい思いで、そこをはなれなければならなかった。なんとなくバカにされたような思いが先にたち、すべては観光政策の手段にもちいられているように思えてならなかった」。ここでは「猛獣」などが「野生」の象徴とされ、そうした「野生」の「猛獣」が見られなかったり、人に馴れきっていたり、観光地化しているという記述がなされている。同じこ

とは植物にも当てはまる。中央アフリカ共和国の例を挙げておく。「少し街をはなれると、ターザン映画でおなじみの、あつるのたれさがった大木や、ワニでもすんでいそうな不気味な沼——沼の水面には美しい蓮の花がいっぱい咲きみだれている——などの見られるジャングル地帯に変わってしまう。ここもまた観光用の地帯として政府が管理しているとのことであった」(p.155)。以上のような「野生」の不在についての記述は、同時に「近代化」についての記述ともなっている。報道班の次のモノローグはそのことをよく表している。「猛獣ときいて、わたくしたちは、こんどのアフリカ旅行をはじめのまえに、多少なりとも、猛獣とハダカの黒人といった概念をもってでかけてきたことを思いだした。しかし、その猛獣にしても、ケニアや南アフリカ連邦にあったような自然動物園以外の場所で、お目にかかるには、よほどの装備をととのえ、最低一ヶ月の期間をかけた探検旅行をしないかぎり、まず、不可能なのぞみであることをさとった」(p.131)。

「植民地」に関する記述は、「アフリカ大陸に行く」同様、今回検討の素材とした記述のなかには多くない。一例としてケニアのナイロビの記述が挙げられる。「『完全にヨーロッパ化された植民地といった感じだね』とわたくしたちは感想を語り合った。それだけ、文化の恩恵に浴しているわけで、生野菜や生水を口にすることもできなかったエチオピアのアジスアベバからきたわたくしたちには、なんとなくほっとしたすくいを感じた思いであった」(p.52)。このように、『アフリカ大陸に行く』での「植民地」についての記述はポジティブなものも少なくなく、結果的に「近代化」の記述となっている。

「近代化」を示唆する記述は多く見られる。「アフリカ大陸に行く」同様、建築物やモノが「近代化」の表徴とされている。むしろ建築物やモノ以外にも次のような記述も多い。「カメルーンはアフリカじゅうで最も就学率が高く、そのパーセンテージは85と聞いたので、わたくしたちは、町はずれの小学校をたずねてみた。そこでは政府要人のことばどおり、教員はすべて黒人であった」(p.134)。『アフリカ大陸に行く』においてアフリカ諸国の「近代化」をとりわけ明確に示唆するのが、「わたくしたち」から始まる報道班の感想である。「わたくしたちは一様に——五千年前にはピラミッドを、そして現在は世界最大をほこるダム建設に専念しているエジプトの将来に、やがて、再び目を見はるときがくるだろう、としみじみと感じさせられた」(p.29-30)。「野生」の箇所でも触れた次のような報道班のモノローグも、逆方向からだが、アフリカ諸国の「近代化」を示唆している。「ハダカの黒人にしても、相当の奥地へはいつでも、いまでは、たいい衣服をまとっているから、絵はがきなどで見るような風俗は、とくに観光用に、演出されたものとしか考えられなかった。お尻をつきだしたホッテントット族などは、もはや博物館の陳列品的存在だと聞かされた。そのほか、小人のピグミー族にしても、少なくとも白人の住んでいるような都会地で見るとは、まったく不可能だということであった」(p.131)。ここでは「ハダカの黒人」や「お尻をつきだしたホッテントット族」、「小人のピグミー族」が、暗に「未開」の象徴とされており、彼らがいまや「博物館の陳列品的存在」だとされることで、アフリカ

諸国の「近代化」が示唆されている。

「独立」に関する記述は、基本的に「アフリカ大陸に行く」と同じだが、記述はさらに詳細である。とりわけ、アフリカ諸国に見られる「独立」の動きが、宗主国とのあいだにどのような関係を結ぶかによって異なっており、そうした関係のあり方次第で「独立」を目指すアフリカ諸国の内部にも複雑な関係が形成されていることが、立場を異にするさまざまな登場人物の視点から奥行きある形で記述される。たとえばベルギー領コンゴの場合、ベルギー政府をはじめとする「この国に住んでいるベルギー人」も、「ベルギー領コンゴが独立国になることは、もうすぐ目の前に見えている」と感じている。これに対してケニアでは、「イギリス人の二世、三世が住みついているが、彼等にいわせると、『ケニアはわれわれイギリス人が開拓した土地である』とはっきり割りきっていた。彼等には、もちろん、この土地を黒人にわたすことは考えられないようであった」(p.56-57) といった具合である。

最後に「日本」に関する記述であるが、これは「アフリカ大陸に行く」とはかなり違う。まず「近代化」のなかの「未開」という記述に関して述べたように、アフリカ諸国で暮らす「在留邦人」の口からは、「アフリカ大陸に行く」では見られなかった現地の人々に対するネガティブな評価が語られる。くわえて登場する「日本人」は、「近代化」の手助けをする「日本人」に限られない。モザンビークの首都ロレンソマルケスでは、日本の商船や貨物船が月平均5、6隻は入港しており、ブラジルに向かう日本人移民も立ち寄っている。ベルギー領コンゴではベルギー人と結婚した山形出身の20歳の女性が暮らしており、コンゴ共和国では第二次世界大戦終結以降ブラザビルで暮らす長崎出身の女性が登場する。カメルーンでは、野口英世より20年以上も前にヤウンデを訪れ、黄熱病で亡くなった箱根出身の角田市蔵という人物の墓地が登場する。

以上のような『アフリカ大陸に行く』の特徴として、次の5点が挙げられる。第一に、『アフリカ大陸に行く』は、「アフリカ大陸に行く」同様、一括りにされがちなアフリカを国単位でより詳細に記述している。第二に、『アフリカ大陸に行く』は、やはり「アフリカ大陸に行く」同様、アフリカについての知識や理解に具体的な形を与えている。ただし記述の密度はより高く、しかも「未開」や「野生」、「近代化」や「独立」の記述に顕著のように記述に奥行きや複雑さがある。そうした記述の多様性は、報道班が視聴者との相互作用に引っ張られることなく、むしろ基本的な認識のフレームから一定の距離を置こうとし、さらにはアフリカ諸国で多くの相互作用に関与したためだと考えられる。くわえて『アフリカ大陸に行く』では、さまざまな人物が登場し、彼ら／彼女らが、同一の対象をめぐる、それぞれの立場から多彩な発言をしているという、記述の多様性が確保されている。第三に、『アフリカ大陸に行く』の記述は、同時代により重心を置いた記述となっている。報道班がピラミッドの映像を撮影しておきながら、『アフリカ大陸に行く』のなかではほとんど「古代文明」に触れておらず、「近代化」や「独立」の記述に相対的に多くのページを割いていることはその一例である。これもまた、報道班がアフリカ諸国で多くの相互作用に関与した効果だと考えられる。第四に、『アフリカ大陸に行く』は、アフリカ

リカにおける「日本」を記述している点で「アフリカ大陸に行く」と同じだが、登場する「日本人」がその国の「近代化」の手助けをする「日本人」に限定されていない点で、「アフリカ大陸に行く」と異なる。第五に、以上のような特徴にもかかわらず、『アフリカ大陸に行く』の記述がアフリカに対する基本的な認識のフレームと根本的に異なっているかといえば、そうではない。『アフリカ大陸に行く』の記述には、従来の認識のフレームに収まりきらない事象やフレームの変更を促す可能性を持った事象を散見できる。だが、「未開」と「近代化」や「植民地」の関係を問うことなく、「近代化」のなかの「未開」という記述を繰り返し、その原因を現地の人々の「知能程度」などに帰す記述に見られるように、『アフリカ大陸に行く』はアフリカに対する認識のフレームを根本的に更新するものではなかった。

まとめれば次のようになる。報道班が望んだのは、「自分の目で見、耳で聞いたまま」の「現実のアフリカの姿」を「日本の人々」に「ただしく伝えたい」ということであった。だが、報道班が見聞きした「現実のアフリカの姿」は、当時のアフリカに対する認識のフレームに根本的な変更を迫るものではなかった。原則としてそれは、報道班がアフリカ諸国においてそうした認識のフレームを適用することで現れてきた、「自分の目で見、耳で聞いたまま」の「現実のアフリカの姿」であった。そしてTV番組「アフリカ大陸に行く」は、そうした報道班が撮影した映像を、視聴者が有するアフリカに対する基本的な認識のフレームに合わせて、さらに丸めたものであった。だがそれでも「アフリカ大陸に行く」の映像は、視聴者が持つアフリカについての知識や理解の解像度を上げる可能性を有していた。そして「アフリカ大陸に行く」よりも記述の多様性を内包していた著書『アフリカ大陸に行く』は、それぞれのアフリカ諸国をより立体的に描きだすものであった。

こうしたふたつの〈アフリカ大陸に行く〉が、当時の視聴者や読者にどのように受け止められたのかはわからない。だが、本稿の冒頭でも触れたように、もし現代において「日本の人々」が有するアフリカに対する認識のフレームが、部分的にはともかく、根本的には当時とさほど変わっていないとすれば、かつてふたつの〈アフリカ大陸に行く〉が当時の視聴者や読者に呼び起こしたのとそれほど変わらない反響を、現代の私たちのなかに聞き取ることができるだろう。と同時に、もしふたつの〈アフリカ大陸に行く〉の映像や記述のいくつかが、どうしようもなく古くさくみえたならば、それは、おそろしく変わりにくいアフリカに対する認識のフレームが、長い時間のなかで、それでも変化しうるものであることを示している、と言えるだろう。

6. 「眠り」のなかにあるフレーム

何らかの認識を形成するとき、経験が果たす役割は大きい。だが、経験を重ねたからといって、その人にとっての経験が豊かになるわけではない。経験を重ねることが、かえって経験を貧弱にすることもある。自分の生まれ育った「文化」を離れて異なる「文化」に接触することが、つね

に経験を豊かにするわけではないのだ。結局は、経験を経験たらしめている枠組のあり方やそれとの距離の取り方しだいである。

経験を組織化する際に通常暗黙に適用される枠組ないし骨組を「フレーム」と呼んだE. ゴフマンは、たとえば社会のなかの階級といった問題が重要であることを認めつつも、そうした問題を直接には扱わず、その根底にある「フレーム」を分析する理由についてこう述べた。「私には、虚偽意識と戦い、人々を真の利益に目覚めさせようと思うならば、やるべきことはたくさんある、と示唆するぐらいしかできない。なぜなら、人々の眠りはあまりに深いからだ」(Goffman 1974: 14)。我々は、経験を経験たらしめている「フレーム」にしばしば無自覚である。それはメディアにおいても同様である。「フレーム」に無自覚なまま繰り返される経験は、「フレーム」を強化させることで、「フレーム」から外れたそれ以外の経験のあり方が存在することを私たちに忘れさせる。

こう書くと、結果的に既存のアフリカに対する認識の「フレーム」から逸脱しきれていない報道班を批判しているかようだが、そうではない。たしかに、本稿がふたつの〈アフリカ大陸に行く〉の考察を通じて多少なりとも接近しようと試みてきたのは、「アフリカ」に関する経験を組織化している「フレーム」であった。しかしながら、それによって本稿が意図したのは、みずからの「アフリカ」に関する経験を組織化している「フレーム」から距離を取り、新しい「フレーム」を仕立て直すための手がかりを得ることである。むしろそれは容易ではない。アフリカを分析するための理論的な枠組が、20世紀後半の近代化論批判から従属論やポスト・コロニアリズム論を経て、あらためて「近代化理論の現代版」とされるグローバリゼーション論に回帰しているように見える現状に、その難しさはよく表れている(川端 2009: 53-54)。だが同時に、戦後における理論的な枠組の変遷は、アフリカに対する新しい「フレーム」が、手持ちの「フレーム」の作り替えによって更新されることを示している。すなわち、対置される「未開」と「近代化」を、「近代化」による「未開」の産出という形で結びつけたり、やはり対置される「植民地」と「独立」を、「独立」後も継続する「植民地」状態という形で結びつけたり、手持ちの「フレーム」からはみ出す事象を繰り返すことで「フレーム」の再構築を図ったり、といったことによって、である。それは、まだ発見されていない素材を見つけ出して新しい「フレーム」の構築を目指すことよりも、はるかに理に適っている。そして、現にふたつの〈アフリカ大陸に行く〉——とりわけ記述の多様性を有した『アフリカ大陸に行く』——のなかには、そうやってアフリカをまなざすための「フレーム」を生み出そうとする片鱗が見て取れる。

アフリカを分析するための理論的な枠組は、私たちの日々の経験を組織化している「フレーム」とつながっている。であるからこそ、アフリカの表象は変わりにくく、またアフリカの表象だけを独立して変更することはできない。だが、それでも「フレーム」の更新は可能である。新しい「フレーム」は、手持ちの「フレーム」の作り替えによって可能になる。そしてその手がかりは、「あまりに深い」私たちの「眠り」のなかにすでに与えられているのである。

補注

本研究は、2016年度第2回NHK番組アーカイブス学術利用トライアル（「中央アフリカ共和国」の表象を再構築する—「海外取材番組 アフリカ大陸に行く」（1959～1960）を中心に—）代表：内海博文）の成果の一部である。

〈引用文献〉

NHK TV番組台本〔第1集 エジプト／第2集 エチオピア／第3集 ケニア・ウガンダ／第5集 ボルトガル領モザンビーク、アンゴラ、ベルギー領コンゴ／第6集 カメルーン、チャド、中央アフリカ共和国〕

- 江上幸雄, 1966, 「特集・海外取材番組の焦点」, 『放送文化』 21-12, 日本放送出版協会.
 藤岡謙二郎・辻田右左男, 1954, 『中学社会科世界地理』 文英堂.
 藤田みどり, 2005, 『アフリカ「発見」: 日本におけるアフリカ像の変遷』 岩波書店.
 Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Cambridge: Harvard.
 平凡社編, 1948, 『社会科事典 第1巻』 平凡社.
 広島図書株式会社, 1949, 『Gin no suzu理科と社会科 1 (3) 中学二年』 広島図書.
 池田宣政, 1934, 『偉人野口英世』 大日本雄辯會講談社.
 川端正久, 2009, 「アフリカ独立50年を考える: アフリカ現代史の書きかえに向けて」, 地域研究コンソーシアム『地域研究』 編集委員会編『地域研究』, Vol. 9 No. 1, 48-67.
 小山文太郎, 香川幹一, 1958, 『中学地理: 教科書解説: 問題解決と整理表解』 清水書院.
 小山保郎・倉富崇人, 1964, 『小学社会科学習事典: どの教科書にもあう』 文英堂.
 NHK特別報道班, 1960, 『アフリカ大陸に行く』 二見書房.
 日本放送協会編, 1977, 『放送五十年史』 日本放送出版協会.
 日本ユネスコ国内委員会, 1958, 『国際理解の見地による社会科教科書の分析』 .
 松田素二, 1997, 「多元的社会への可能性」, 宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』 講談社現代新書, 550-555.
 西村睦男, 1958, 『やさしく詳しい中学社会科世界地理』 吉野書房.
 坂口昂編, 1913, 『中等教育西洋史教科書』 開成館.
 佐野勇, 1961, 「座談会 人種, 食物, 宗教それから NHK海外特別報道班の中間報告」, 『放送文化』 16-8, 日本放送出版協会.
 世界文化画報社, 1953, 『世界少年少女画報 6 (7)』 世界文化画報社.
 世界文化社, 1961, 『学習画報 2 (10)』 世界文化社.
 社会科教育研究会編, 1949, 『新しい世界地理 (社会科学習小学校用)』 清水書院.
 初等教育研究会編, 1932, 『教育研究』 .
 高橋篤, 1932, 『質を高潮したる新地理教授の実際 尋常6学年』 啓文社書店.
 徳山正人・朝倉隆太郎, 1952, 『研究と発表のための社会科 中学1年 (社会科図解副教科書)』 杉山書店.
 豊原謙一, 1960, 「シュバイツァー博士を訪ねて」, 『国際文化』 77, 国際文化振興會.
 豊原謙一, 1969, 「座談会 日本の放送=その断面 (34) 海外取材番組10年のあゆみ」, 『放送文化』 24-10, 日本放送出版協会.
 東京社会科教育研究所編, 1948, 『未開人の生活 1 (文化シリーズ; 3)』 東紅社.
 山本幸雄編, 1956, 『中学生の地理: 日本地理・世界地理: まとめと問題』 昇竜堂出版.
 山鹿誠次ほか, 1957, 『少年少女世界地理風俗全集 10』 岩崎書店.
 山下昭夫, 1960, 「アフリカを旅して」, 『The Youth's companion』 15-4号, 日本英語教育協会.
 全国学習活動研究会編, 1961, 『学習年鑑: 中学1年 昭和36年版』 学習研究社.

内海・櫛引：ふたつの〈アフリカ大陸に行く〉

「幻の記録映画『新しいアフリカ』東京の図書館で保管」『西日本新聞』2018年8月7日，電子版（<https://www.nishinippon.co.jp/nnp/culture/article/439330/>，閲覧日：2018年11月3日）

